

モラルサイエンス研究会（令和元年5月8日）発表要旨

〈道徳で人と社会を幸せにする〉団体から〈道徳に生きる人と社会を支援する〉団体への
転換を――モラロジー研究所への提言――

人間学研究室

主任研究員 川久保剛

モラロジー研究所は、〈道徳で人と社会を幸せにする〉を活動の理念に掲げている。この理念は、道徳実行の結果として人と社会の幸福が実現されるとする廣池千九郎の考え方に由来する。しかしこの考え方は妥当であろうか。本発表では、この考え方にいくつか疑問を呈したい。まず、道徳実行の結果、「世俗的幸福」が得られるということはないのではないか。次に、道徳実行の結果、「精神的幸福」が得られるとして、その内実はいかなるものであろうか。それは廣池のいうような意味とは異なるものとして理解できるのではないだろうか。さらに、そもそも道徳実行の「結果」は学問的に検証できない性質のものではないだろうか。本発表ではこのような問いの探究を通して、従来とは異なるモラロジー研究所の活動理念を提唱したい。それは〈道徳に生きる人と社会を支援する〉という言葉で表現される考え方である。それは、廣池のように道徳実行の「結果」を重視するのではなく、道徳実行それ自体を重視する立場である。別の表現を用いれば、廣池のように道徳を「手段」として捉えるのではなく、道徳を他に奉仕するものなき「目的」ととらえる立場である。時間軸でいうと、道徳実行の価値を「結果」という「未来」から確認するのではなく、いま・ここの「現在」の時間のなかで確認する考え方である。モラロジーはモラルサイエンスの一学説であり、他のモラルサイエンスの学説とぶつけあうことで、より高次の考え方にアウフヘーベンされるであろう。本発表では、そのような見方にたって、モラロジーの学説批判を試みたい。